

全国大会参加報告

～NWECフォーラム2016～（平成28年8月26日）

特別講演：均等法から30年、あらたな明日へ ～女性の活躍について考える～

山本 とし子

赤松良子公益財団法人日本ユニセフ協会会長のご講演を聞いて、現在働いている女性の皆様は職場内の位置づけがはっきりされてよかったと思いました。私が共働きをしていた40年前は産休、育休もそして子育ての時間（法的優遇された時間）はほとんど無に近かったし、職業婦人として本当に苦労しました。

このような均等法が制定され、働く女性に目が向けられた事など日々改善されて、今に至っている事は本当に良かったと思います。

男女共同参画の視点からみれば、日本女性の地位向上は、もっともっと見直されなければならないと考えます。

ワークショップ：男女共同参画スタディーツアー ～ドイツの生き方を探る旅～報告会

会員が”女性の地位向上と男女平等参画社会の実現”を目指して活動している。

海外に目を向け、女性が活躍している諸国を訪ね、ヒントを学び得る事。今回は第二次大戦で同じ敗戦国ドイツを選び研修に行ってきた報告会。東ドイツが統一され、今は小学校から民主主義を教えている（相手の話をよく聞く、色々な考え方がある事を知る）。

ひとつ気になった事、日本人は意見に反論すると感情的になるが、ドイツでは意見についてみんなで話し合う。

2016/8/26



2017/8/25



～NWECフォーラム2017～（平成29年8月25日）



特別講演：変わる勇気、変えるアクション～女性も男性もともに暮らしやすい社会を創る～

〈講師：山口 香 筑波大学体育系准教授、ソウルオリンピック柔道銅メダリスト〉

今村 清子

小学校1年生から柔道を始め世界でトップを競うアスリートに輝いた山口香氏は独特のパワーとさすがしく凛とした姿勢で「変わる勇気変えるアクション」を問題提起していらっしゃいました。

目的達成への気概を養い、持ち続ける勇気が大切で、男性と女性の様々な違いを尊重し、これからの社会を共同で創ることが必要だにご高話下さいました。グローバル時代の中でビジネスにもヒントになり同感です。プレッシャーのかかる環境で、向上心を持ち内面の自分磨きをしたいと思いました。

全国大会参加報告

～日本女性会議2016秋田～

(平成28年10月28日～平成28年10月30日)



小田切 進

記念シンポジウム 秋田発「ケアリング（気遣いあう）社会をめざして

コーディネーターの中村順子さんのお話では、ケアリングとは他者を助けると共に自分の立ち位置を考えることであり、余計なお世話でなく「偉大なおせっかい」というケアリングマインドを持つことが大切であると説明されました。また、人口減少率日本一の秋田にて菊池まゆみさんは藤里町トータルケア推進事業として治療ではない、福祉職だからできる「その人が持っている力を捜す」支援を考え、若者の引きこもり支援及び老人支援に取り組んでいるとのことでした。安大輔さんも人、物、金はないが今ある物を活かす「ネオクラシック」、「秋田美人100人キャンペーン」を実施し東京、大阪へと発信しているとのこと、甲府のように小さな町でも大いに参考になりました。

人権分科会 女性たちの今、そして未来をつくる 講師 上野千鶴子さん

2016年、日本のジェンダーギャップ指数は下がり先進国の中での順位は最低です。女性はもっと社会のリーダーとならねばならない。1945年女性参政権が認められたが、女性票は戸主の指示による従属的な家族票として捉えられていました。しかし、市川房枝の遺言「権利の上に眠るな」のように、家族票から独立して自分の運命を自分で決める投票行動が大切です。対談の中で小松真希子理学療法士は、以前は白衣の「土方」と言われ男性社会の中で頑張ってきたが、非正規雇用では「親権」を取ることも難しく、離婚すると「わがままな女だ」とレッテルを貼られることもあったが、怒りを女性の生きる力とした。しかし娘には「社会的弊害を受けない自由な生き方をしてほしい。」と話されました。上野先生の話された「女は日本に最後に残された資源である」という言葉に納得しました。



(上野千鶴子さん)



(発言中の推進委員中村さん)

～日本女性会議2017とまこまい～

(平成29年10月13日～平成29年10月15日)



特別揮毫・講演

違いはかけがえのない個性
～ダウン症の娘と共に生きて～

阿部 誠

ダウン症という障害を持つ金沢翔子さんの「すべてを幸せに変える」その感性は素晴らしいと感じた。世間の噂に苦しみ、嘆く母泰子さんに対しても、「苦しい時、闇の中に光がある」と母を励まし続け、周りの人たちにやさしい光と愛を注ぐ子どもに成長した翔子さん。共に助け合って生きる、良いものは全て人に与えたいと、私は皆に喜んでもらいたいという翔子さんに、母泰子さんは「尊さは目に見えない、生きている限り絶望ではない」と訴えた。翔子さんの揮毫と泰子さんの講演に胸を打たれました。自分も男女共同参画推進委員として、社会の中に分け入って行動することが大事なのだと学びました。社会を良くするため、自分の気持ち、心を育むことの大切さを再確認した大会となった。

第1分科会（DV）シンポジウム デートDV予防教育の実践

中村 京子

シンポジウムではDV被害者が日々殺されている実情、DV被害を受けつつ生き延びた人々もDV被害の連鎖を生んでしまうこと、その被害の芽は中高生の頃、異性とのお付き合いの中で生まれてきていること。中学生、高校生、大学生とそれぞれの成長の度合いに応じて学校教育の場で何がDVにあたるのかについて、繰り返し啓蒙していく事の重要性やDVの被害者の方々を受け入れる体制づくりの大切さなど、熱のこもった話が繰り返された。北海道には7箇所のシェルターがあると聞き、北海道に比べて小さな山梨とはいえ、機能しているシェルターの数が足りているのか心配になった。苫小牧市内の中学校の大多数がデートDVに関する教育を民間団体の力を借りて行っているという話に感心した。甲府市の実情はどうなのだろうか。

